専修大学社会科学研究所　社会科学年報　第29号　1995年3月

〈研究ノート〉

第三世界の地域研究の現在

——地理学のもう一つの道——

福　島　義　和

はしがき
1　地誌学とは何か——上野登・森川洋の業績から
2　地理学におけるフィールドばなれ現象と地誌学の危機
3　第三世界の地域研究と地誌学研究のフレームワーク
4　第三世界の地域研究・地誌研究から世界をみる——結びにかえて

はしがき

先日，日本経済新聞（1994.10.16）の記事のなかに，「負の国際化」という聞き慣れない言葉の見出しを見つけた。要旨は「最近，外国人による犯罪が増えており，特に人口比からみると日本の犯罪発生率は高い。ドイツ，フランス，スウェーデンでは，外国人の犯罪が2，3割に達し，深刻な社会問題になっている。」というのである。その対策は，「外国人を地域社会で孤立させないことだ。」として記事を締めくくっている。

この記事を読み終わって筆者は次の事を即座に考えた。

異文化を持つ外国人との付き合い方につくづく我々日本人が慣れていない，苦手であるという事である。我々の日頃の無意識な行動や発言が，彼らを地域において孤立化させているのではないかという懸念である。

日本社会全体が欧米諸国に追い付け，追い越せと生産第一主義の考え方にあまり疑問を抱かず働いてきたことに対し，最近企業に束縛されずに個人の生活を大事にしようとする価値観が労働者の一部に普及してきている

ように思える。そして彼等が地域社会の活動に積極的に参加し始めたのである。景気の悪化に伴う残業時間の縮小などが幸運にも後押しをしたわけである。主体的に地域と関わり，住民自らが地域を形成していくことは，民主主義の原点である。

今後様々な形で「負の国際化」がますます我々の身の回りで起こることが予想される。従来の伝統的な学問体系だけではそれらの解決方法を探ることは困難である。そのようななか，最近地域研究[1)] (area studies) が注目されるようになった。以下に中嶋嶺雄の『国際関係論—同時代史への羅針盤』(中央公論社，1992) より少し長くなるが，地域研究の目的と効用の箇所を引用する。

第二次世界大戦後，欧米において発達した地域研究は，国際関係論[2)]と同様，「インターディシィプリナリー(学際的)」であるとともに，「マルティディシプリナリー(多専門的)」な学問であるが，その目的は，諸集団，諸民族，諸国家の行動様式や特質を内在的に理解する点にある。そのようなアプローチによってこそ，諸集団間，諸民族間，諸国家間の不信や軋轢，緊張や紛争を回避する道が開けるのであろう。またコミニケーション・ギャップや文化摩擦を極小化して，異文化交流 (inter-cultural exchanges) を真に可能にするのだともいえよう。

国際化に伴う諸問題に対し，中嶋がいうこれらの地域研究や国際関係論，次章でふれる地誌学がどれだけ有効であるか検討してみる。

1. 地誌学とは何か——上野登・森川洋の業績から

すでに22年前に上野登が『地誌学の原点』(1972, 大明堂) のなかで「地理学は，地理的認識を明確に育てるべきである。」という立場から「地理的知識を基礎にした地理認識の重要性」を主張した。この認識とは「知識を前提にしつつ，その知識を有効に生かして，人間社会を推進してゆくもので，知識とは次元を異にする人間の行動である。」と理解されている。

このような理解に立つ上野は，木内信蔵の『地域概論ーその理論と応用』（1968，東大出版会）で展開された地誌論には大きな欠陥があると指摘する。

それは，「地域の変化が論理的に把握されていないことである。それは系統地理学の不在を意味する。系統地理と地誌の二元論を結節する環が喪失していること，これが第一の欠陥である。第二の欠陥は，〈住民〉が論理的に把握されていないことである。」つまり1972年に木内の地誌論を人間学不在の地誌論として批判したのである。

これらの22年前の問題提起にたいして，果たして日本の学会誌に発表された地誌学の論文や日本の大学で講義される地誌学は回答を持っているであろうか。

確かに，1960年代以降コンピューターの発達を背景に計量主義や論理実証主義の考えから日本においても計量地理学がおおいに普及し，現在一定の評価を受けるに至っているが，地誌学の存在そのものが否定されたわけではない。むしろ現在，地誌学の新たな展開が期待されていると言っても過言ではない。例えば，現実に筆者の留学先であったイギリスのサセックス大学では地理情報システム（ＧＩＳ）研究とアフリカやインドの地誌研究（地域研究）は学生の興味ある代表的なテーマであり，これら二つの分野が両立している。

ところで計量地理学に精通している森川[3)]によれば，世界において1970年代以降，地誌学の社会的有用性が再認識されるようになってきたと指摘している。特に英語圏地理学のなかで，新しい地誌学（new regional geography）または，再興地誌学（reconstructed regional geography）とよばれる地誌学再興の動きは，場所のユニークさの解明を目的とする伝統的地誌学の関心に対して，社会科学理論を用いて説明しようとするものである。

具体的に地誌研究の動向は次の３点に要約される（森川）。

(1) 人間の主体的行為の役割を重視する，構造化理論に基づく地誌研究

(2) 経済や労働市場が中心で，問題性を持った地誌（問題指向的地誌）ではあるが，地域の全体像を把握することは少し困難なロカリティー研究 (locality studies) としての地誌研究

(3) 世界経済システムのなかでの地域分化・地域変化を目標とした世界システムに基づく地誌研究（筆者はシステムを形成する空間ユニットの選定が重要であると考える）

すこし引用が長くなるが，森川は伝統的地誌学における問題点を次の2点に指摘している。

(1) 従来の地誌研究が地域的差異に重点が置かれ，現象や事象の地図表現を特に重視したことである。それは，ややもすると人間社会の持つ本質的な問題から距離を置くことになり，社会科学としての興味深い問題性に乏しい場合が多かった。

(2) 従来の地誌記述では産業経済や景観などが中心をなし，数値や地図説明でもって全体的な特徴を示し，生活者の素顔が見えにくいきらいがあった。

以上のように英語圏地誌学を中心にした研究動向の分析から，日本における社会的有用性の高い地誌研究の発達を期待する森川も，かつて木内の人間学不在の地誌学批判を行なった上野にも，彼らに共通する基底には新しい地誌学の展開が地誌学と系統地理学を結節させ，さらにそのことが地理学の発展の起爆剤になると信じるイデオロギーが存在するものと考える。

では次の章で地誌研究の最近の動向をインド研究を通して概観してみる。

2. 地理学におけるフィールドばなれ現象と地誌学の危機

日本におけるインドの地誌研究を振り返ると，まず1973年に広島大学地理学教室スタッフによって，1967年，1969年の二回の学術調査をまとめた，505ページの報告書『インド集落の変貌——ガンガ中下流域の村落と都市』（米倉二郎編著，古今書院）の出版を忘れることはできない。おそらく管

見するかぎり伝統的地誌学のインド地誌の業績において，現在までこれ以上のものは出版されていないといっても過言ではない。

その２年後の1975年に，広島大学のスタッフを中心に京都大学の応地利明を新たに加え『インド・パンジャーブの動態誌的研究』（石田寛編，広島大学総合地誌研究資料室）が出版された。これらの二つの報告書は動態地誌（dynamic regional geography）的方法を採用している。

シュペートマン（H. Spathmann）はこの動態地誌[4]を，「他地域の本質的特徴をなすドミナントなものを前面にすえ，それとの関係において他事象を扱うべきである。」とし，「既往の地誌が現実を静態的に記述するにすぎなかったのを改めて動態的に取扱うこと」を主張している。広島大学の調査グループが具体的に採用したのは，この考えを踏襲しながら「パンジャーブ地方の地理的事象を自然的ものから人文的ものへと静的に逐一取り上げて記載していくという方法ではなく，また逐一過去の各時代を追って現在に至るという歴史的方法でもなく，パンジャーブでもっとも特徴的なものをまずとりあげ，動的に，その発生的解釈（genetic interpretation）を行なうのである。それとの関連におい他の現象をとりあげてその本質を究明する。」ものである。

1987年には，総合地誌研究資料センター（1986年４月に広島大学に設立）から，従来の調査地に新たにデカン高原南部の農村を加え，合計14の村落のインテンシブな調査を行なった報告書が，総合地誌研究叢書17『海外地域研究の理論と技法――インド農村の地理学的研究――』として出版されている。表１に各報告書の目次一覧を今後の総合的な外国地誌研究の参考として掲げておく。

広島大学の総合地誌研究資料センターが設立された同年に，古賀正則を代表者にして著された『大都市におけるセグリゲーションの国際比較研究』が出版された。この報告書では，セグリゲーションの用語を社会的なセグリゲーション，すなわち社会集団間の社会的諸関係に見られる差別，

表 1　主要なインド地誌の報告書の目次一覧

書名	インド集落の変貌 —ガンガ中下流域の村落と都市—	インド・パンジャーブの動態地誌的研究	海外地域研究の理論と技法 —インド農村の地理学的研究—
年度	1973	1975	1987
目次	序論 総論 第1章　インドの集落（農村・都市） 各論 第2章　ガンガ中流域の農村 第3章　ガンガ下流平野の農村 第4章　農村中心地 第5章　工業都市 第6章　ガンガ中・下流平野における核心都市	序論 総論 第1章　広島大学北インド集落・農村の調査 各論 第2章　インド・パンジャーブ平原における農村の展開と「緑の革命」 第3章　パンジャーブ後進地農村の展開 第4章　Green Revolution in India 第5章　インド北西部・ガッガルバーナ村とマンガリ村における農村工業の構造と展開 第6章　インド北西部における小規模工業経営者の形成過程の類型とその特色 第7章　綿工業都市・アーマダバードの形成 第8章　A Punjab Plain Village 第9章　インド・パンジャーブ地方における水問題の新展開 第10章　パンジャーブ	序 Ⅰ　広島大学インド地理学調査の経緯 1　広島大学インド地理学調査の発端 2　第Ⅰ期研究計画（北インド・プロジェクト） 3　第Ⅱ期研究計画（南インド・プロジェクト） Ⅱ　標本調査村落の諸相 1　ガンガ中・下流平野の農村 2　パンジャーブ平原の農村 3　デカン高原南部の農村 Ⅲ　海外地域研究の方法・技術 1　フィールド・ワークの思想 2　海外地域調査の全体計画 3　予備的調査段階の諸作業 4　現地データの収集とその方法

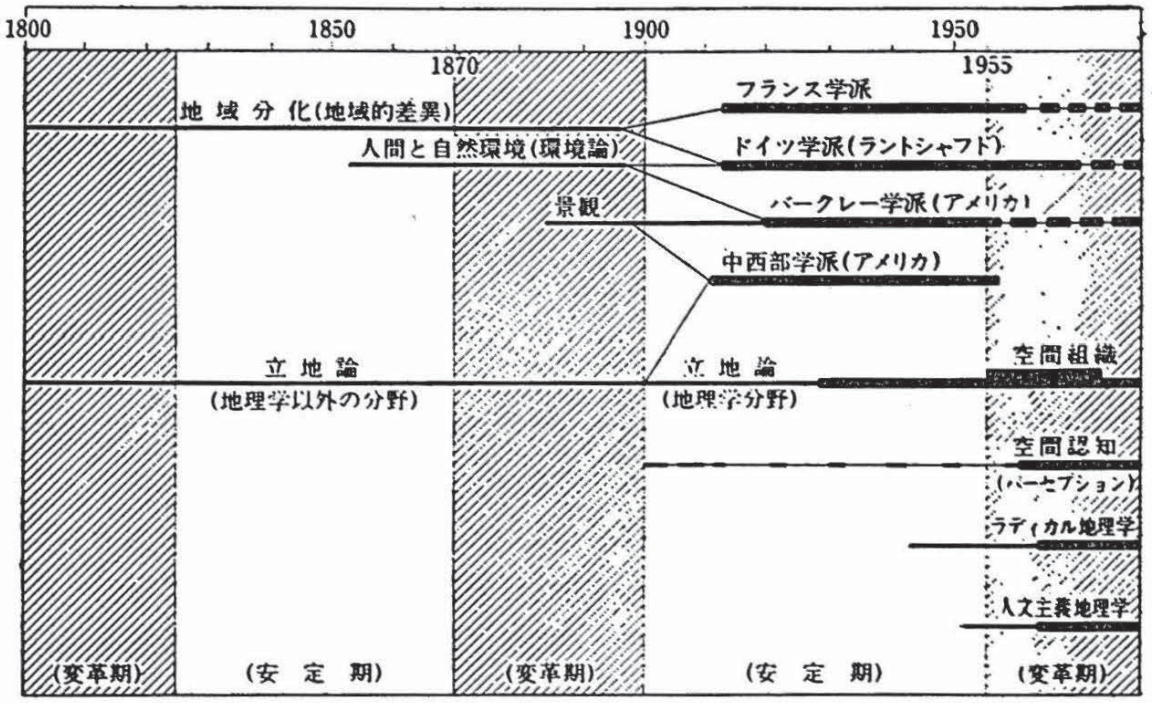
	地方の気候の特性に関する二，三問題 第11章　インド・ターール沙漠砂丘研究の系譜とその問題点 第12章　インド・ターール砂漠，パンジャーブ平原の過去一万年の気候変化 第13章　The Geomorphology of the Himalayan Foot-Hills and Glacial Landforms of the Lesser Himalayas in the Punjab.	

隔離あるいは断絶をも含むものと広義に解釈している。しかし，報告書の内容は，社会集団とりわけエスニック集団間における居住地の空間的分離という狭義で分析されており，インドのカルカッタやボンベイを中心に日本を含め，９本の論文が掲載されている。この報告書は明らかに広島大学の諸報告の動態地誌学的研究とは異なり，第三世界の諸都市を中心にした問題指向的地誌の色彩が強いものである。報告書の中で熊谷[5]も指摘するように，セグリゲーション形成のメカニズムと国家の役割を動態的に研究の射程に入れることが今後の重要な課題である。

筆者の考えではインド地誌研究に限らず，地誌学研究全体のなかに民族的特徴を考慮したセグリゲーション研究は社会的有効性からみても今後大いに増加するであろう[6]。当然第三世界の都市に限らず，先進工業国（日本も含む）の都市研究[7]においても同様な傾向である。

一方，『インド集落の変貌』のような、本格的（伝統的）な地誌研究は非常に生まれにくい状況にある。その理由は，世界同様日本においても人文地理学の多様な展開が活発におこなわれているからである（図１を参照）。

図 1　人文地理学の変革期と安定期。Claval (1984) による。



出所：手塚章 (1988) 地理学の革新と伝統（中村和郎・高橋伸夫編『地理学への紹待』，古今書院）

確かに手塚[8]が言うように「多面的で豊富な学問的伝統を持つ地理学の多様性」を強調すべきことは理解できるし，「地理学全体に一つのパラダイムを押し付けようとしても，無駄であること」も理解できる。しかし，J．F．ハート[9]がA．A．A．Gの会長演説で「地理学研究の退潮の原因として，地理学の系統的文化にともなう理論偏重（科学主義）とフィールド・ワークの軽視にある」ことを指摘しているように，現実の地理学あるいは地誌学への世間の評価には厳しいものがある。

ハートの演説が行なわれた1980年代初頭は，アメリカにおいてミシガン大学やピッツバーグ大学の伝統ある地理学科が相次いで閉鎖された時期でもある。幸いなことに日本では事態がここまで進行していないが，他人ごとではない。その一つの打開策がフィールド・ワークを中心に据えた地誌学の再興にあることにちがいない。米田[10]がいう「フィールド離れ現象」は，伝統あるフィールド科学としての地理学の危機的状況といえる。米田自身

もこの認識のうえに立って，ハートに倣いフィールドを核にした人文主義的地誌学（humanistic regional geography）の展開を試みている。システム論的地誌学[11]が一般的にはシステムを構成する諸要素間の関係に固執するあまり，実態としての地域全体の把握がおろそかにされている。主観的要素の強い人文主義的地誌学は、システム論的地誌学と比較すると地域の把握の方法，あるいは地域イメージに関して大きく異なっていることは明らかである。

3. 第三世界の地域研究と地誌学研究のフレームワーク

第三世界の地域に対するイメージは我々の一方的な先入観が入りやすく，正確に地域のイメージを把握することが困難である。しかし，現在，地理学以外の諸分野でも地域への関心は非常に強く，地域概念そのものは地理学だけのテクニカルタームではない。いつまでも実態のない地域に固執し続けると，地域や場所のもつ本質的意味（意味の構造）を読みとることが困難になってくる[12]。最近の地域研究をみても、地域の画定化（compartmentalization）を打破するために地域概念のあいまいさ（ambiguity）を積極的に評価しようとする動きがある[13]。

このように考えると，地域，特に外国の地域を研究する場合にはその地域の抱えている諸問題を動態的に的確に分析し，正確に記述することが重要となる。前章で触れたように，この研究を問題指向的地誌と呼んでもいいだろう。

本章では，第三世界の地域研究や地誌学研究の方法論上のフレームワークを検討する[14]。

例えば，筆者がマドラス大都市圏の居住問題を低所得者層に焦点を絞って報告[15]をしたが，報告の最終的関心はインドの住宅政策にはどのような問題点があるか，さらには第三世界における国家の管理運営の方法には何か問題点があるか，等である。もちろん，筆者の現在の研究は極めて不十分

で，今後に残された課題はあまりにも大きい。その具体的な課題の一つに肥大化するメガシティ（超巨大都市）の抑制といった成長管理政策がある。成長管理政策は第三世界と先進工業国に共通した緊急を要する重要課題で，よりグローバルな視点が必要である。

今まで言及してきた様々な問題（eg. セグリゲーション，スラムを含む住宅，失業(者)，飢餓，民族紛争，移民労働者，成長管理政策等）を抱えている地域（国家を含む）に対して，どのような視点からアプローチをすればいいのだろうか。

政治学をディシプリンとする中嶋[16]は，国際社会への視座として，図2のように階層的に3つの地域レヴェル（グローバル，リージョナル、ローカル）に分け，各レヴェル相互間の作用と反作用，影響と被影響の浸透関係を十分に認識すべきだとしている。さらに重要なことは，グローバルなレヴェルのみに注目していると，国際社会の発展を内部もしくは底辺から規定する要因が見えなくなり，また，ローカルなレヴェルのみに没入してし

図 2　国際社会への視座

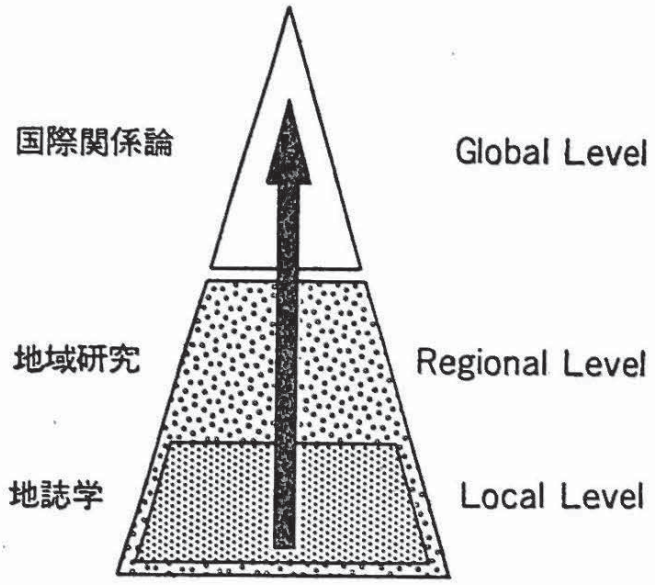
出所：中嶋嶺雄(1992)『国際関係論―同時代史への羅針盤』，中央公論社，を一部修正

てしまうと,「地域」それ自体の全体像も欠落することになってしまうと警告している。なお，３つの地域レヴェルのうち，ローカルとリージョナルレヴェルは地域研究が，リージョナルとグローバルレヴェルは国際関係論が主として担当することになっている。

そこで中嶋の作成した図２を参考に，筆者が地誌学を含め，地域研究と国際関係論との相互関係[17]を示すと，図３になる。この図から，ローカリティ(locality，地方性・地方色・場所性）と関連するローカルレヴェルの研究として，地理学を中心に社会学や文化人類学がある。またリージョナリティ（regionality，地域性・局所性）と関連するリージョナルレヴェルの地域研究には，経済学・政治学・歴史学等が中心に展開している。そして三角形の上部に位置するグローバルレヴェルの研究は，国際経済学，国際政治学，国際社会学，国際関係史といった新しい応用的分野として国際関係論が，近代的国境を越えて起こるトランスナショナルで，ボーダレスな社会的諸現象のメカニズムの解明にあたることになる。

このようにみてくると，主としてローカルレヴェルを取り扱う地理学，特に外国地誌学は，系統地理学を基礎にして，国際関係論や地域研究の上

図 3　国際関係論，地域研究および地誌学の相互関連図



（筆者作成）

部構造を支えながら，自らは下部構造として存在する。そしてこの二つの構造は相互に補完的に関連しあっている。さらに図3のなかに矢印で示されたように，local→regional→global といったより高次な地域レヴェルの方向に，地誌学が展開していくことが望ましい。この学問的戦略こそが地誌学の危機を回避し，地理学の国際化，つまり「国際地理学」のレーゾンデートルになるだろう。

地誌学を「新しい地誌学」という名称で呼ぼうと，あるいは地域研究の一つとして位置付けようと，地理学研究者の外国（特に第三世界）研究が多くの専門分野で幅広く読まれ，また国際社会の認識（知識ではない）に有効に役立つことが証明されれば，諸外国の例をあげなくても自ずと地理学そのものにも新たな発展が期待できる。

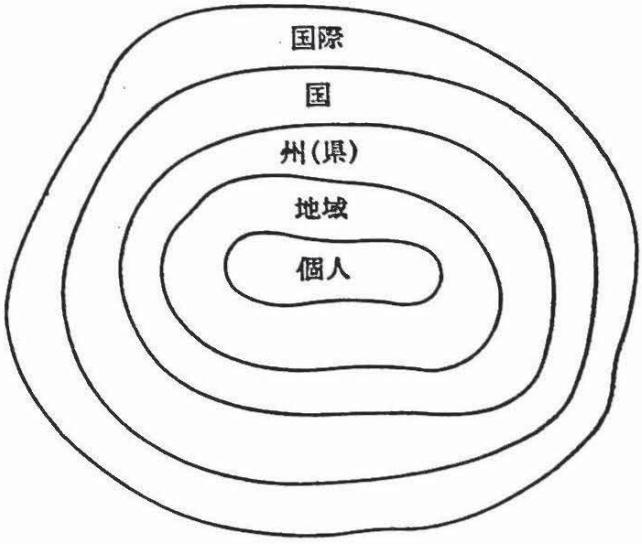
1960年の初期以降，「科学」という名のもとに地理学の計量化が推し薦められ，日本においても現在地理情報システム（ＧＩＳ）の研究が地理学会を活性化させている。[18] しかし，フィールド科学としては人類学より長い歴史をもつ地理学（特に地誌学）が，第三世界を中心にした外国地域をあまり熱心に研究してこなかったのは，まったく不可思議である。

4. 第三世界の地域研究・地誌研究から世界をみる
——結びにかえて

新しい地誌学の展開の一つとして，グローバルレヴェルを指向した第三世界のローカルレヴェルにおける問題指向的，かつ動態的な地域研究が有望であると考えられる（図3参照）。

ところで，この「グローバルレヴェルを指向する」ということが，なかなか難しい。前述したように，一応，local→regional→global として解釈できるが，結局個人と世界との結びつき（接点）をどのように理解し，認識し，行動していくかである。1章で紹介した上野の言葉を繰り返せば，「認識とは知識を前提にしつつ，その知識を有効に生かして，人間社会を

図 4　領域的な単位にかんする個人の社会化
（同心円的な世界観）



出所：C. F. アルジャー（吉田新一郎編訳），
『地域からの国際化―国家関係論を越えて』，日本評論社，1987。

推進していく人間の行動であり」，「その地理的認識を明確に育てることが地理学である」となる。

図4は，個人の同心円的な世界観を示している。個人差はあるが，個人の生活と国際的な出来事や動向がいろいろな媒体物（eg. 日常生活品）を通して密接につながっていることを我々は経験的に知っている。イギリスのセインズベリー店の果物コーナーには，地中海やアフリカ，ラテンアメリカなどからの色鮮やかな品物が並んでいる。実際イギリスにいると，日本にいるときと比較するとずっとアフリカの国々の存在を身近に感じる。

総じて日本もイギリスも第三世界の数多くの国々の存在なくしては，国家として存続できない。第三世界の人々の安い労働賃金に支えられた製品や収穫物が，日本やイギリス等の先進工業国に大量に輸入されている。その結果，先進工業国と第三世界との1人当たりのGNP格差は拡大する一方であり，第三世界の国家内でも富の不公正な配分により，一部の富裕層が富の50%以上を占有することがしばしばあり，その不公正配分は現在拡

大傾向にある。

例えば，1975年のインドのデータによると，富裕層（上位20%世帯）の所得割合は49.4%で，貧困層（下位20%世帯）の所得割合は7.0%である。インドネシアやフィリピンなどでもほとんど同じ割合の傾向であるが，ペルーやメキシコ，チリ等のラテンアメリカにおける貧富の差はインド等よりさらに大きい。

第三世界の国々は常に失業，飢え，民族紛争などを内包しながら，先進工業国からは間接的に収奪され続けている。先進工業国サイドからの構造調整の政策や援助も，第三世界の国々にとって，なかなか100%成功しているとはいえない。むしろ国家内に新たな貧富の差を生み出すケースもある。

このようにみてくると，ローカルレヴェルのインテンシブなフィールドワークに基づいた地域研究（eg. 地誌学）と，リージョナルやグローバルな地域研究（eg. 国際関係論）を活発に相互交流的を行なうことがきわめて大切である。そして地誌学を学ぶ我々にとって，地域のもつ重み，場所のもつ意味（構造）を正確に読み取ることである。つまり，地域から学ぶ姿勢が重要である。

旧西ドイツの作家である，ギュンター・グラスの次の言葉に，地誌学や地域研究を学ぶ者はどのように答えられるのだろうか。

「カルカッタはドアの前に立っていて，避けることはできない」

（ローマ・クラブの講演草稿，1989）

〈注および参考文献〉

1） 代表的な地域研究の参考文献を掲げておく。

黒田壽郎編（1987）『地域研究の方法と中東学』，三修社.
慶応義塾大学地域研究センター編（1989）『地域研究と第三世界』，慶応通信.
中嶋嶺雄，チャルマーズ・ジョンソン（1989）『地域研究の現在』，大修館書店.
鈴木一郎（1990）『地域研究入門—異文化理解への道』，東京大学出版会.

山口博一（1991）『地域研究論』，アジア経済研究所.
板垣雄三（1992）『歴史の現在と地域学一現代中東への視角』，岩波書店.
加藤普章編（1992）『入門現代地域研究一国際社会をどう読み取るか』，昭和堂.
矢野暢（1993）『地域研究の手法』，弘文堂.
————（1993）『地域研究のフロンティア』，弘文堂.
高浜賛（1994）「対日政策めぐり熾烈な論争」，『THIS IS 読売』10月号，188—191頁.

2） 本文中で引用した文献は省略する。
許世楷，他2名（1976）『国際関係論基礎研究』，福村出版.
川田侃（1979）『現代国際関係論』，日本放送協会.
衛藤瀋吉等他3名（1982）『国際関係論』，東京大学出版会.
F．パーキンソン著，初瀬龍平・松尾雅嗣訳（1991）『国際関係の思想』，岩波書店.
百瀬宏（1994）『国際関係学』，東大出版会.

3） 森川洋（1992）「地誌学の研究動向に関する一考察」，『地理科学』47—1，15—35頁.
なお，外国の地域研究の楽しさ・意義を具体的に述べたものとして次のものがある。
石田寛（1982）『地域研究のすすめ 続・牛歩遅遅』，古今書院.

4） シュペートマンの動態地誌論の記述は『インド・パンジャーブの動態誌的研究』に依る。また，動態地誌については，山口岳志はその基礎的研究として占拠推移 sequent occupance を地域に促して追求することをあげている(「地域研究と動態地誌一カナダの事例」，谷岡武雄編『世界地誌の研究と教育』，1975，大明堂，74—83頁)。

5） 態谷圭知（1987）「第三世界都市研究の問題構成とセグリゲーション」（古賀正則『大都市におけるセグリゲーションの国際比較研究』，昭和60,61年度文部省科学研究費補助金〔総合研究A〕研究成果報告書，1～23頁).

6） 東南アジアにおけるセグリゲーション研究として以下のものを掲げておく。
山下清海（1985）『シンガポールにおける華人方言集団のすみわけとその崩壊』地理評 58—5.
山本哲也（1990）『東南アジア華人社会と東アジアの 発展に関する 比較研究報告』昭和62,63，平成元年度，文部省科学研究補助金〔重点領域研究〕報告書，1～65頁.

7） 田島康弘（1992）「イギリスにおけるアラブ人のＳＥＧＲＥＧＡＴＩＯＮ」，

『アジア・アフリカ研究』32—4，2—18頁.

8） 手塚章（1988）「地理学の革新と伝統」（中村和郎・高橋伸夫編『地理学への招待』，古今書院，168—191頁）.

9）・10） 米田巌（1984）「海外地域研究とフィールド・ワークの思想—異文化の黙示録をひもとくために—」，『人文地理』36—2，35—55頁.

11） 地誌学をシステム論的視点から積極的にアプローチした基本的文献として以下の4点をあげる。

野間・門村・中村・野沢・堀（1974）「地域のシステムに関する諸外国の研究—その展望」，地学雑誌83，19～37頁，103～124頁.

水津一郎（1982）『地域の論理—世界と国家と地方—』，古今書院.

山口岳志編（1985）『世界の都市システム—新しい地誌の試み—』，古今書院.

中村和郎・岩田修二編（1986）『地誌学を考える（戸谷洋先生退職記念地誌学論文集）』，古今書院.

12） 山野正彦（1979）「空間構造の人文主義的解読法—今日の人文地理学の視覚—」，人文地理 31—1，46—68頁.

13） 拙稿（1989）「主観の地理学からみた都市論」『人文科学研究所月報』（専修大学）130，11—19頁.

「地域研究と社会諸科学㊦」（『朝日新聞』1988．1．12）.

14） 特に，第三世界研究とのかかわり方や問題意識の必要性をフィールドワークを基に鋭く指摘した地理学の論文として以下の3点をあげる。

内藤正典（1989）「現代地理学の再検討—第三世界研究の視点から—（第一部）」，地域学研究2（駒澤大学応用地理研究所），21—36頁.

———（1994）「地誌の終焉」，『法政地理』22，32—43頁.

藤巻正己（1990）「グローバリズム時代における「第三世界の地理学」—第三世界とのかかわり方再考—」，『大学時報』（日本私立大学連盟1211，108—115頁.

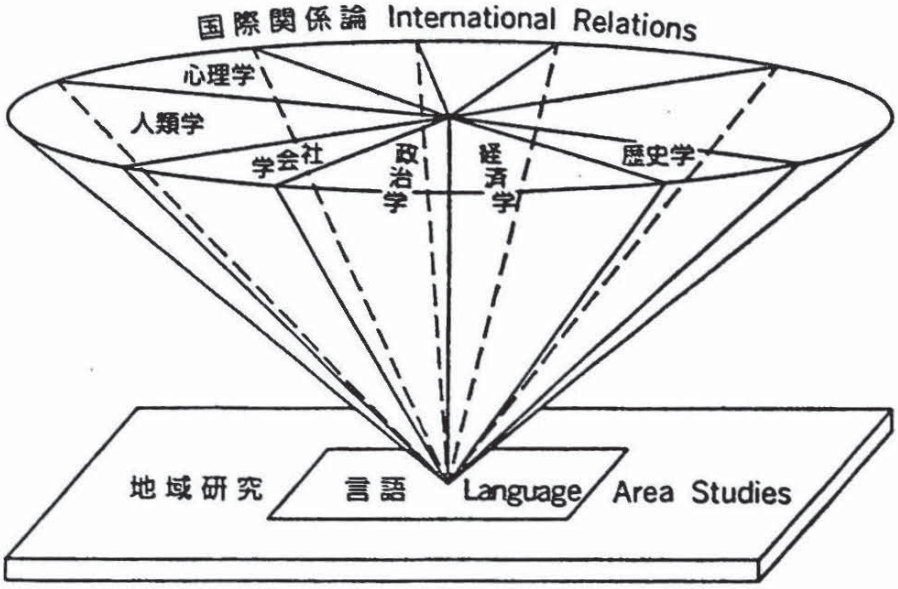
15） 拙稿（1994）「マドラス大都市圏の居住問題—第三世界の地域研究」，『現文研』（専修大学）70，25—56頁.

16） 中嶋嶺雄（1992）『国際関係論—同時代史への羅針盤』，中央公論社，76—79頁.

中嶋のフィールドに基づいた基本的文献として，次のものがある。

中嶋嶺雄（1977）『逆説のアジア』，北洋社.

17) 国際関係論と地域研究の関連は，中嶋（文献15）によると，下の図のようになる。ただし，地理学の位置付けが欠落している。



18) 高阪宏行（1994）『行政とビジネスのための地理情報システム』，古今書院.

〔付記〕 現在の地域研究の動向をみるには，異文化研究やシステム研究などに言及する必要があるが，現在の筆者には力量不足であり，次の機会に譲ることにする。

なお最後になりましたが，昨年末に42歳の若さで亡くなられた西村孝彦氏の御霊前にこの拙稿を捧げます。合掌。